

# アンチ・ドーピング活動についての批判的検討

## A critical study on the activity of anti-doping

1K03B205-4 横川容平

指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 吉永武史 先生

### <研究動機及び目的>

昨今、世界で「アンチ・ドーピングの重要性」が提唱されており、ドーピングに対する非難の目がますます強くなっている。国際的なアンチ・ドーピング活動は1960年代から国際オリンピック委員（International Olympic Committee：以下「IOC」と略す）を中心として行われており、1999年には世界アンチ・ドーピング機構（World Anti-Doping Agency：以下「WADA」と略す）が国際的な機関として設立された。日本国内においてはWADAに遅れること2年、2001年に財団法人日本アンチ・ドーピング機構（Japan Anti-Doping Agency：以下「JADA」と略す）が設立され、国内のアンチ・ドーピング活動を統括して活動を推進している。

しかし、このような活動を行っているにもかかわらず、ドーピングの勢いは留まるどころか、かえって薬物使用方法の巧妙化や新薬の登場を招いてしまっている。

私はこの現状を知り、ベン・ジョンソン事件を幼心に覚えていたことも重なって、「ドーピングはなぜ行われるのか」「ドーピングはなぜいけないのか」と考えるようになった。また、そもそもドーピングはどのようにして派生してきたのかということに疑問を持ち、本研究のテーマとした。

そこで、本研究ではドーピングがどのようにして始まり、どのようにして広まってきたのかを示し、現在のドーピング問題に至った理由を明らかにしたい。また、ドーピングが悪とされ、アンチ・ドーピング活動が盛んに行われている理由についても明らかにしていく。そして、アンチ・ドーピング活動が行われているにもかかわらず、ドーピングがなくなる現状を受け、アンチ・ドーピング活動の問題点について考察し、今後の課題に対する提言を行う。

### <研究方法>

本研究は、関連する文献の講読による文献研究によって行う。具体的にはドーピングに関する文献とWADA・JADAなどのアンチ・ドーピング機関のホームページを参照して研究を進める。

### <各章の概要>

#### ・第1章 ドーピングの定義と歴史

アンチ・ドーピングの批判的検討を行う前に、まず“ドーピング”という言葉の由来とその言葉の持つ意味、IOCなどによるドーピングの定義を示し、ドーピングの歴史、つまりはどのようにしてドーピングが広まっていったのか述べる。また、実際に起きたドーピング問題の一例として、世にドーピングという言葉を広める要因となった「ベン・ジョンソン事件」を取り上げ、ドーピング問題とはどのようなものであるか示す。

#### ・第2章 ドーピングの現実・現状

第1節では、競技者や競技団体がドーピングに着手する理由について記述し、ドーピングが悪いと言われながらも、使用される原因について考察する。第2節では、実際に報道されたドーピングに関するニュースを列挙し、あらゆる方面からドーピングの現状について記述する。第3節では、薬物使用方法の巧妙化や新薬の登場などについて示し、血液ドーピングや中絶ドーピング、遺伝子ドーピングなどの非人道的行為について述べる。

#### ・第3章 アンチ・ドーピング

アンチ・ドーピング活動を行う理由としてドーピングを悪とする根拠を述べ、それからアンチ・ドーピング活動が活発化した経緯について示す。また、WADAやJADA、国際陸上競技連盟（International Association of Athletics Federations：以下「IAAF」と略す）、日本陸上競技連盟（Japan Association of Athletics Federation：以下「JAAF」と略す）における具体的なアンチ・ドーピング活動を挙げ、アンチ・ドーピングの現状を述べる。第3節では、ドーピング禁止理由の明確化がなされていないことやサプリメントに禁止薬物が含まれていること、薬物の入手が非常に簡単であることなど、アンチ・ドーピング活動の諸問題を取り上げる。そして、第4節において低酸素室の禁止など、これからのアンチ・ドーピングについて考察する。

#### ・結章

第1節ならびに第2節では「本研究のまとめ」をする。また、第2節においては「ドーピングのないクリーンなスポーツ」を目指すための今後の課題を考察する。